がいます。奥州藤原氏末期に南秋田郡一円を支配した豪族、大河兼任です。

彼の名、大河は現在の馬場目川に由来しているという説があります。

作　者

大河兼任の乱（後平泉の役）

奥州に栄華を誇った奥州藤原家も源頼朝の大軍に抗すべくもなく敗れさりました。

文治５年（1189年）9月藤原泰衛が逃亡先で河田次郎に殺害されて、藤原家が滅亡しました。同年10月源頼朝が鎌倉に凱旋しております。ところが、この戦塵がまだ覚めやらない内に新たな戦いがおきました。

文治５年（1189年）１２月、秋田県の南秋田郡北部から山本郡南部にかけての領主（五城目の旧領主？＝ 五城目町大川にいたと推定（国史大辞典））であった大河兼任が叛乱を起こしたのです。

このときは源家の支配を嫌う平泉恩顧の武士が方々におりましたので、この人たちが大河兼任の下に集まりました。大河兼任は安倍家に繋がる人と言われております（？）。

安倍貞任の弟の安倍正任の４代あとの子孫で、父武嗣と伯父武任は泰衛軍とともに討死しております。大河兼任は蜂起するにあたって使者を南側の由利維平に送って次のように申しております。

｛古今の間、六親もしくは夫婦の怨敵に報いるは、尋常のことなり。未だ主人の敵を討つの例はあらず。兼任独り其の例を始めんがために鎌倉に赴くところなり。｝兼任はこの由利維平と北側の橘公業に加勢を頼みましたが断られております。

（吾妻鏡）

文治六年正月六日、奥州故泰衛が郎従大河次郎兼任以下、去年窮冬より以来、叛逆を企て、或は伊予の守義経と号して、出羽国海辺の庄に出でて、或は左馬守義仲の嫡男朝日冠者と称して、同国山北（せんぼく）に起（た）ちて各（おのおの）逆党を結び、遂に兼任嫡子鶴太郎・次男於畿内次郎並びに七千余騎の凶徒を相具し、鎌倉の方に向い、首途（かどで）せしむ。

其の路は河北・秋田城等を歴(へ)、大関山を越え多賀国府に出でんと疑し、秋田・大方（大潟）より志加の渡を打融（うちとお）るの間、氷はにはかに消えて、五千余人たちまちにもって溺死しをわんぬ。天譴（てんけん）を蒙るか。ここに兼任使者を由利中八維平が許に送りて云はく、古今の間、六親もしくは夫婦の怨敵に報ずるは、尋常のことなり。いまだ主人の敵を討つの例あらず。兼任ひとりその例を始めんがために鎌倉に赴くところなりてへれば、よって維平、小鹿島の大社山毛々左田の辺に馳せ向ひ、防ぎ戦ふこと両時に及びて、維平討ち取られおはんぬ。兼任もまた千福（せんぼく）・山本方に向う、津軽に到りて重ねて合戦し、宇佐見平次以下の御家人及び雑色沢安等を殺戮すと云々。之に依って在国の御家人ら面々に飛脚を進じ、事の由を言上すと云々。

大河兼任の兄弟は既に鎌倉の御家人になっておりました。今度の叛乱には加わらなかったようです。

（吾妻鏡）

文治六年正月七日

去年奥州の囚人二藤次忠季（大河）は大河次郎兼任が弟なり。すこぶる物議を背かざるの間、すでに御家人となる。よって仰せつけらるる事ありて奥州に下向す。途中において兼任が叛逆のことを聞き、今日帰参するところなり。これ兄弟たりといえども全く同意せざるの由、貞心を顕はさんがためなりと云々。殊に御感ありて、早く奥州に馳せ向い、兼任を追討すべきの旨、仰せ含めらるると云々。忠季が兄新田三郎入道、同じく兼任を背きて参上すと云々。彼等参上の今、始めて聞こしめし驚くによりて、軍勢を發遣せらるべきの由、その沙汰に及ぶ。盛時・行政等召文を書きて、相模国以西の御家人に下さる。征伐の用意を存じ、参上すべきの趣なり。

文治元年（1190年）１月、幕府は奥州に所領のある御家人に兼任討伐の出動命令を出しております。